中野谷地区遺跡群発掘調査概報2

—平成元年度県営畑地帯総合土地改良事業横
野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1991

群馬県安中市教育委員会

中野谷地区遺跡群発掘調査概報2

—平成元年度県営畑地帯総合土地改良事業横
野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1991

群馬県安中市教育委員会

上空から見た中原遺跡

延々と続く中原遺跡の溝

序

安中市中野谷地区は碓氷川の南に広がる肥沃な台地の一角にあります。この台地にはたくさんの遺跡が存在するため、畑地帯の土地改良事業の実施に伴い、昨年度に引続き発掘調査を実施いたしました。

この年度の調査では、中野谷地区遺跡群のうち、中原遺跡、東畑遺跡、金井谷戸遺跡、下宿東遺跡、北東・堤下遺跡、乙北原遺跡の6遺跡が発見され、調査されました。これらの遺跡は縄文時代から平安時代までの遺跡ですが、今回の調査で特筆される成果は奈良・平安時代に中野谷地区に「牧」とよばれる馬を飼育した牧場の存在したことが明かになった点にあります。この古代の「牧」の発見は碓氷郡の歴史を綴る上で、欠くことのできない事柄です。碓氷峠と東山道と坂本・野尻の駅といった古代の交通史を結び付ける際、キーワードとなるのは「馬」です。そして今回、その馬がいったいどこで飼われていたか、といった謎のひとつがここに解明されたわけであります。

なお、発掘調査にご協力いただきました地元の地権者をはじめとする皆さまや、寒風吹きすさぶ中、安中市の文化財保護の主旨をご理解いただき調査に従事していただいた大勢の方々にはこの場を借りて厚くお礼を申し上げたいと存じます。

平成3年3月

安中市教育委員会
教育長　佐　藤　三　木　岩

例　　言

1　本書は高崎土地改良事務所が実施した平成元年度県営総合土地改良事業横野平地区の埋蔵文化財発掘調査概報である。

2　平成元年度に調査を実施した遺跡は、中原（なかはら）遺跡（G－8）、東畑（ひがしばた）遺跡（G－10）、金井谷戸（かないがいと）遺跡（G－10B）、下宿東（しもじゅくひがし）遺跡（G－11）、北東（きたひがし）・堤下（つつみした）遺跡（G－12）、乙北原（おつきたはら）遺跡（G－12）であるが、本報告書はこのうち、下塚田遺跡、北下原遺跡、落合原遺跡の調査概報である。

3　発掘調査及び遺物整理は平成元年度・平成２年度文化財保存国庫補助金、県費補助金及び、群馬県高崎土地改良事務所からの委託金により実施した。

4　発掘調査は元年度に実施し、遺物整理は平成元年度・平成２年度に実施した。

5　調査は安中市教育委員会社会教育課主事大工原豊が担当し、主査松本豊が主として現場庶務を行った。

6　調査組織は次のとおりである。

安中市教育委員会事務局

教育部長	上原満雄	主　査	松本　豊
社会教育課長	茂木勝文（平成２年４月転出）	主　事	田中秀雄
	中島茂弥	同	大工原豊（担当）
社会教育係長	伊藤惣一	同	千田茂雄
文化財係長	森泉寿義雄（平成２年４月～）	同	小黒勝明

7　本書の編集・執筆は大工原が行った。

8　遺構の写真撮影は原則として大工原が行ったが、航空写真は（有）青高館に委託して行った。

9　遺構図の作成・トレースは新井幸介　新井真弓　（故）田村悦子が行った。

10　調査区の国家座標取り付け及び、測量基準杭の設置は（株）桜井測量設計事務所に委託して実施した。

11　テフラ・鉱物分析は（株）パリノ・サーヴェイに委託し、プラントオパール分析は（有）古環境研究所に委託して実施した。

12　馬骨の鑑定は宮崎重雄氏（県立大間々高校）に依頼した。

13　今回の調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

14　発掘調査及び遺物整理の期間中次の方々に御指導、御協力いただいた。記して感謝の意を表したい。（敬称略・５０音順）

麻生敏隆　石岡憲雄　石川正之助　石坂茂　小野和之　金子直行　小林達雄　坂口一　清水豊　志村哲　関根慎二　高井佳弘　高島英之　谷口康浩　谷藤康彦　堤隆　能登健　福田豊彦　藤巻幸男　前沢和之　前原豊　松田猛　三浦茂三郎　水田稔　宮崎朝雄　宮崎重雄　山口英雄　若狭徹　中島宏

15　発掘調査及び遺物整理従事者は次のとおりである。

青木昭　秋山広吉　阿部喜一郎　新井幸介　新井真弓　伊藤寅雄　稲塚しづ江　井上慎也　石井久子　上原和夫　大塚すえ子　大塚竹治　岡島美智子　小野良子　小野始　小野泰野　金井京子　金井武司　北村かつ子　北村ふさ子　小林豊　斎藤加代子　斎藤三枝　佐藤健　清水正　下マスエ　白石俊子　神宮幸四郎　鈴木茂美　鈴木八郎　須藤順子　須藤ダイ　多胡梅子　多胡かつ子　多胡克己　多胡静　多胡末子　多胡光子　多胡操　多胡光子　多胡好江　多胡好夫　高橋さと子　高橋敏男　田島元治　田島かつ子　田島保市　田中昭人　田中利策　（故）田村悦子　田村英生　土田勝美　永井悦子　長岡政江　中川京子　中山生三　野口輝雄　飛田明日香　飛田紀子　広上良枝　古立京　堀口隆敬　真下恭子　松原鬼長　松本恭子　黛弘義　丸岡民子　森由一　矢野久雄　山田一夫　山田きの江　山村ヨネ子　湯川光子　吉沢道子　吉田清　和田宏子

本 文 目 次

序

例　言

目　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　調査の方法と経過 …… 1

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 4

Ⅳ　層　　序 …… 7

Ⅴ　遺　跡　各　説 …… 8

1　中原遺跡 …… 8

2　東畑遺跡 …… 20

3　金井谷戸遺跡 …… 23

4　下宿東遺跡 …… 24

5　北東・堤下遺跡 …… 26

6　乙北原遺跡 …… 26

Ⅵ　ま　と　め …… 30

1　縄文時代前期前半期の集落について …… 30

2　奈良・平安時代の溝とその付随遺構について …… 30

挿図目次

第１図　中野谷地区遺跡群と周辺遺跡の位置図……２
第２図　中野谷地区遺跡群平成元年度調査遺跡位置図……３
第３図　調査区設定図……折込
第４図　基本層序柱状図……７
第５図　中原遺跡Ａ区全体図・土橋部分全体図…折込
第６図　中原遺跡Ｂ区全体図……折込
第７図　中原遺跡Ｃ区全体図……折込
第８図　中原遺跡Ｄ区全体図……15
第９図　中原遺跡Ｅ区全体図……16
第10図　中原遺跡Ｆ区全体図……折込
第11図　東畑遺跡全体図……折込
第12図　金井谷戸遺跡全体図……23
第13図　下宿東遺跡全体図……25
第14図　北東・堤下遺跡全体図……折込
第15図　乙北原遺跡全体図……29

図版目次

口　絵　上空から見た中原遺跡
延々と続く中原遺跡の溝

図版－１　中原遺跡全景、中原遺跡Ａ区・土橋部分
図版－２　中原遺跡Ａ区～Ｂ区・Ｍ－1号溝、Ａ区全景、Ｍ－１号溝土層断面、ＨＴ－1号掘立柱建物址、Ｏ－1号落し穴
図版－３　中原遺跡Ｃ区全景、Ｄ区全景、Ｅ区全景、Ｃ区Ｊ－3・4・9号住居址、Ｄ区Ｊ－14号住居址
図版－４　中原遺跡Ｆ区全景(1)、Ｆ区全景(2)、Ｆ区Ｍ－１号溝南西隅部分、Ｆ区水場・流木、Ｆ区馬骨出土状況
図版－５　東畑遺跡全景、円形柱穴列、Ｊ－8号住居址、金井谷戸遺跡全景、Ｓ－1・2号集石
図版－６　下宿東遺跡全景、北東・堤下遺跡試掘トレンチ、平地式建物址、Ｈ－３号住居址竈、乙北原遺跡Ｊ－1号住居址

I　調査に至る経過

県営横野平畑地帯総合土地改良事業は昭和63年度から８カ年計画で開始され、今回は第２年度目である。前年度に引き続き事業が実施される運びとなり、高崎土地改良事務所と横野平土地改良区との間で事前に協議・調整を行った。そして、前年度には調査と工事との期間が重なってしまい、十分な調査期間を確保するのが困難な状況であったため、その問題に対処するべく、三者間で協議を行い、夏期に農作物が取り入れられる農地について、先行して調査を実施することになった。また、前年度の土地改良事業の経緯から、道路・水路部分以外で掘削等により影響を受ける部分が比較的多く、こうした部分については調査区を拡大して対処する必要性が生じてきた。そして、高崎土地改良事務所より掘削が深い部分を予め提示してもらい、その図面に基づき当教育委員会で調査計画を立て、発掘調査を実施することになった。

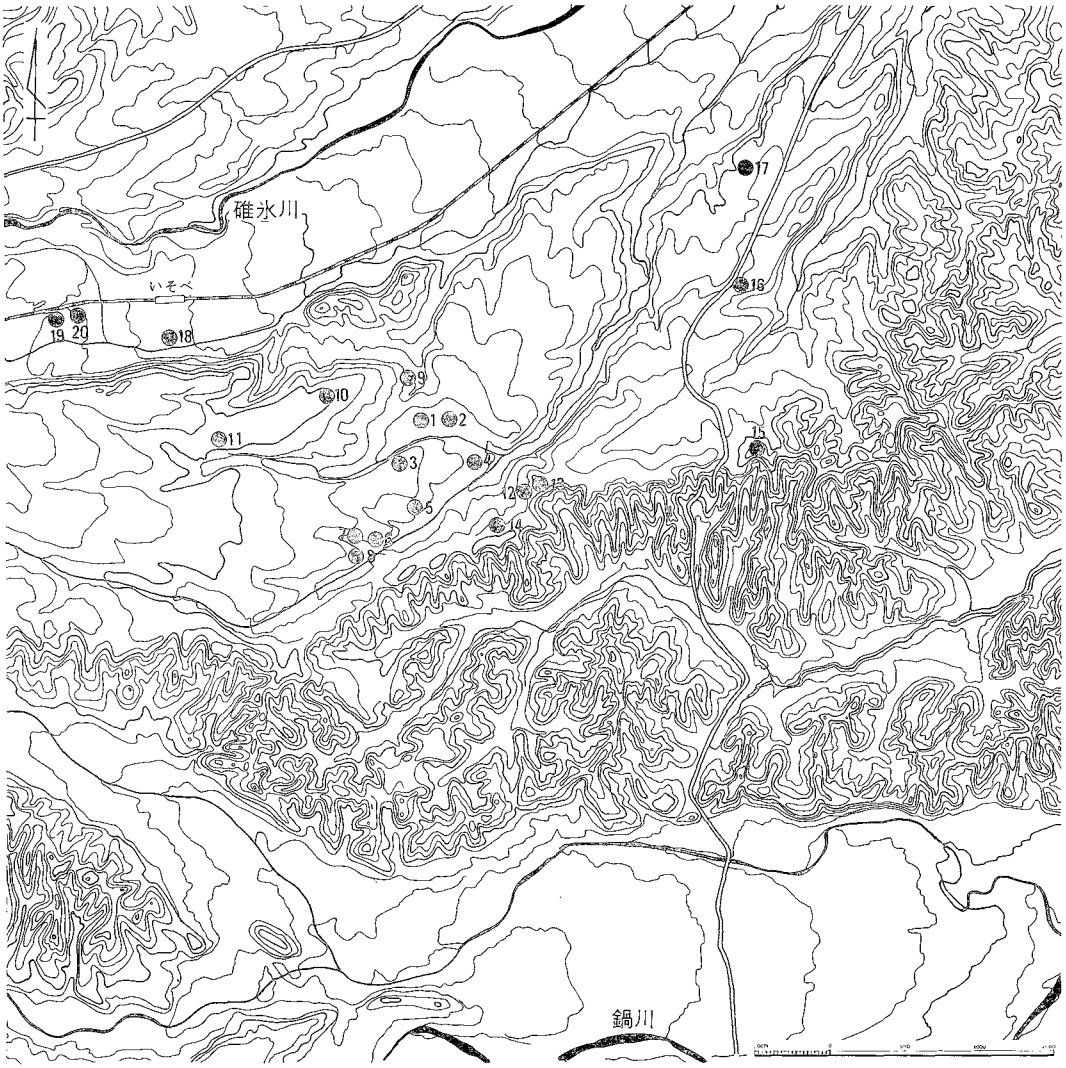
また、平成２年度土地改良実施予定区域の一部については、本年度事業実施区域の発掘調査終了後、試掘調査を実施することになった。

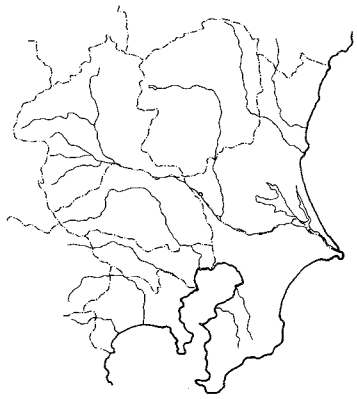
II　調査の方法と経過

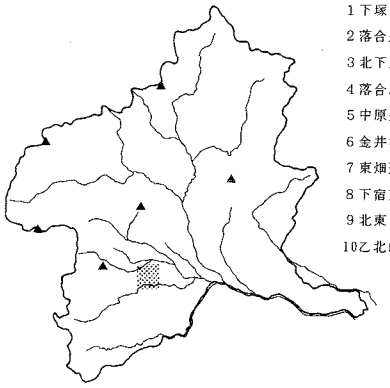
中野谷地区遺跡群の発掘調査は、広大な区域について、数カ年にわたって継続的に実施されることと、遺跡が方々に点在することが予想されることから、土地改良事業実施区域全体を含む範囲に100m×100mの大グリッドと４ｍ×４ｍ小グリッドを併用するかたちでグリッドを設定した。グリッドの呼称は北西隅の座標値とすることとし、北から南へアルファベットでＡ、Ｂ、Ｃ‥‥Ｙ、西から東へ算用数字で１、２、３‥‥と４ｍ進法で呼ぶことにした。そして、南北方向はアルファベットの先頭に１、２、３‥‥と算用数字を付けて、100mでアルファベットが一巡するようにし、Ａのラインを大グリッドのラインとした。また、東西方向は25ｎ＋１（ｎ＝０、１、２、３‥‥）のラインを大グリッドのラインとした。そして、これらの座標値は国家座標に取り付けた。

発掘調査は道路・水路部分に沿って実施した。そして、遺構・遺物が濃密に存在し、かつ切土等で遺構に影響を及ぼすと判断される部分については、拡張して調査区を設定した。作業の工程は原則として、調査ライン測量、バックホーによる表土掘削、遺構確認作業、遺構精査、遺構写真撮影、遺構平面図・遺物分布図・セクション図作成の順に行った。

遺物整理作業は遺物の水洗・注記→接合・復元→拓本・実測→トレースの順で行い、並行して遺構図面の整理・作成→トレース、各種台帳作成、写真整理を行った。また、遺物実測図の一部については、実測用写真撮影を行い、それを用いて実測することにした。

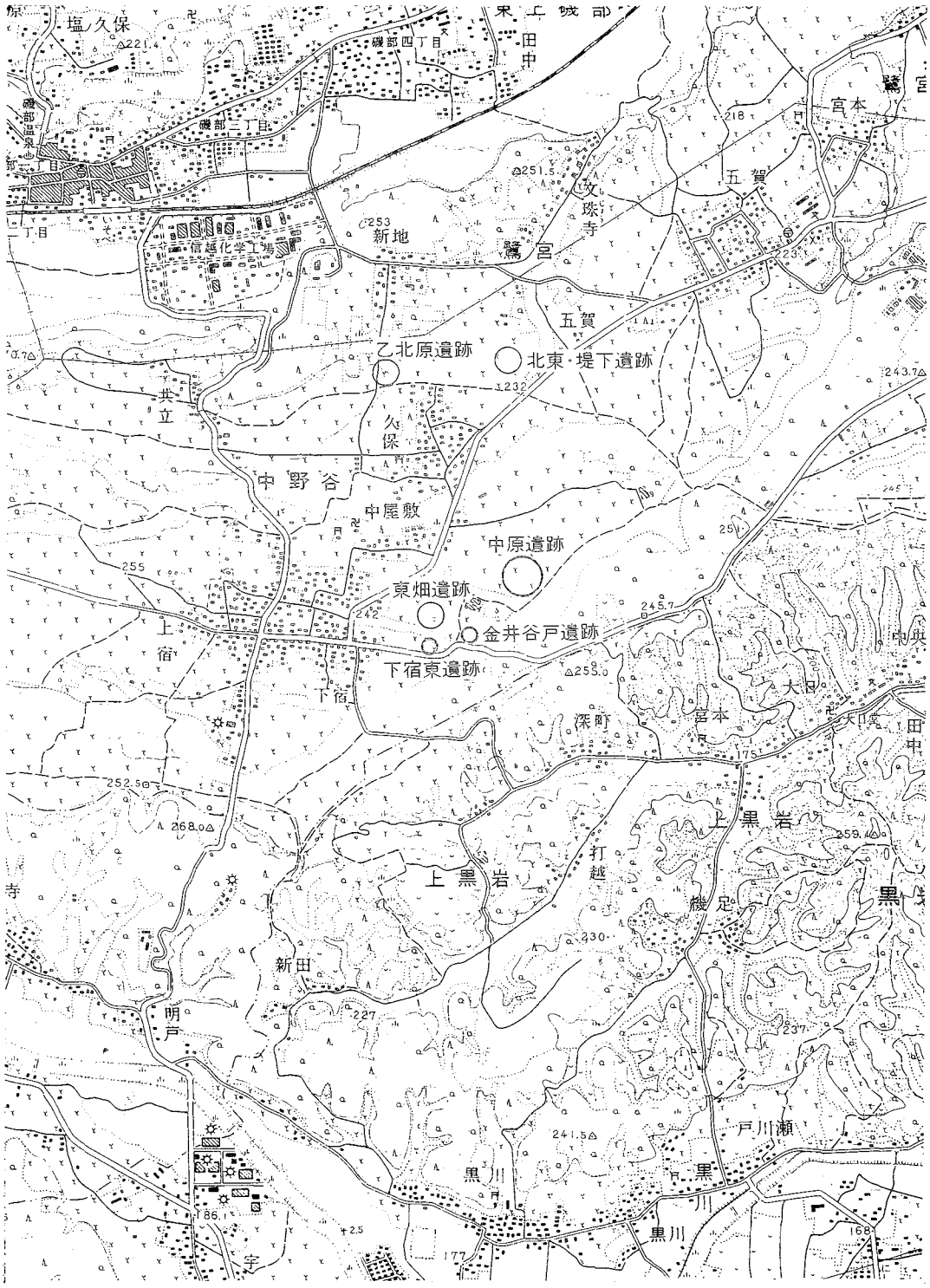






1 下塚田遺跡
2 落合遺跡
3 北下原遺跡
4 落合原遺跡
5 中原遺跡
6 金井谷戸遺跡
7 東畑遺跡
8 下宿東遺跡
9 北東・堤下遺跡
10乙 北原遺跡
11天神原遺跡
12注連引原遺跡
13注連引原Ⅱ遺跡
14大下原遺跡
15経塚古墳
16道前久保遺跡
17諏訪ノ木遺跡
18田中田・久保田遺跡
19西裏・西新井遺跡
20諏訪辺遺跡

第１図　中野谷地区遺跡群と周辺遺跡の位置図



第２図　中野谷地区遺跡群平成元年度調査遺跡位置図（１：25,000）

発掘調査は平成元年10月２日から平成２年３月８日まで実施した。また、遺物整理は平成２年１月29日から３月31日までの間と、７月２日から10月23日までの間断続的に実施した。

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境

中野谷地区遺跡群は、群馬県安中市中野谷に存在する。本遺跡群は安中市の南西部に位置し、碓氷川上位段丘のなだらかな台地の最も発達した部分にあたる。台地の南部は碓氷川の支流猫沢川が西から東へ流れ、その南側に存在するなだらかな丘陵地から分離している。また、台地の内部は猫沢川に通じる小規模な河川により開析され、東西に細長い幾つもの台地に区分されている。

今回調査を実施した中原遺跡（５）は中野谷字中原・中原南・東原地内に存在する。東畑遺跡（７）は字東畑地内に存在する。金井谷戸遺跡（６）は字金井谷戸地内に存在する。下宿東遺跡（８）は字下宿東地内に存在する。北東・堤下遺跡（９）は字北東・堤下地内に存在する。乙北原遺跡（10）は字乙北原・下北原・西上磯部字新地にかけて存在する。これらの遺跡のうち、中原遺跡、金井谷戸遺跡は猫沢川本流に隣接する台地に存在し、東畑遺跡は猫沢川支流の小河川に隣接する台地に存在する。また、北東・堤下遺跡と乙北原遺跡は中野谷丘陵地帯の北縁部に位置する台地上に存在する。

次に、周辺の遺跡を外観する。中原遺跡の存在する台地には中原遺跡とほぼ同時期である縄文時代前期前半期の集落址である北下原遺跡（３）、落合原遺跡（４）が存在する。また、中原遺跡の北の台地には奈良・平安時代の鍛冶工房址が確認された下塚田遺跡（１）と旧石器時代から奈良・平安時代にかけての水場・沼地・溜井として利用された落合遺跡（２）が存在する。そして、弥生時代前期から中期にかけての注連引原遺跡（12）・同Ⅱ遺跡（13）、弥生時代中期前半期の下原遺跡、縄文時代前期を中心とする大下原遺跡（14）は猫沢川の南岸丘陵に並んで存在している。（第１図・第２図）。

また、北東・堤下遺跡、乙北原遺跡と同じ台地上では、西に縄文時代後期・晩期の集落址である天神原遺跡（11）が存在する。そして、中野谷の台地の北の低地部分には古墳時代から平安時代の集落址である西裏・西新井遺跡（19）、大王寺工業団地遺跡（松井田町）や、平安時代の水田址が検出された田中田・久保田遺跡（18）が存在している。

第3図　調査区設定図

Ⅳ　層　　序

中野谷地区遺跡群の基本層序は第４図のとおりである。示標テフラは浅間Ａ軽石層（Ⅰｂ層）、浅間Ｂ軽石層（Ⅱｂ層）、板鼻黄色軽石層（Ⅵ）が今回の調査では確認されている。以下に各層の特徴について述べることにする。

Ⅰａ層　黒褐色土層　浅間Ａ軽石を多量混入する。現在の耕作土層で、しまり、粘性はない。

Ⅰｂ層　灰白色軽石層　浅間Ａ軽石（As－Ａ：1783年）の純層。層厚は攪乱を受けていない場合約20cmであるが、ほとんど除去されている。

Ⅱａ層　黒色土層　浅間Ｂ軽石を多量混入する。しまり、粘性はない。この層も存在しないことが多く、溝状遺構の覆土上層などとして存在する。

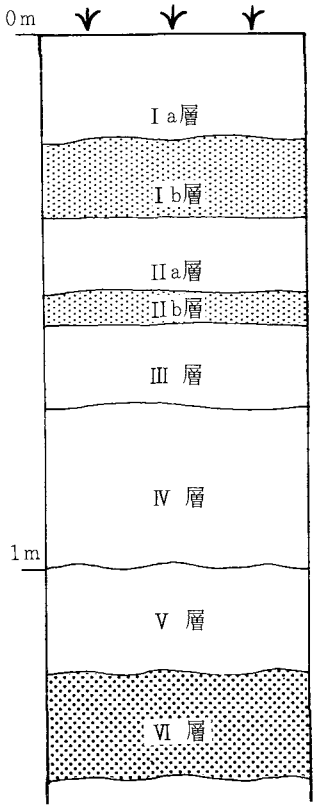
Ⅱｂ層　灰褐色軽石層　浅間Ｂ軽石（As－Ｂ：1108年）の純層。通常はほとんど存在しないが、低地や溝状遺構の覆土上層などに存在する。中原遺跡や下宿遺跡の溝の上層にはすべてこの層が堆積している。

Ⅲ層　黒色土層　粘性はややあるが、しまりはあまりない。As－Ｂはまったく混入しない。平地でも存在するが、耕作等の影響で存在しない場合もある。古墳時代～平安時代の遺構の覆土としても存在する。

Ⅳ層　暗褐色土層　Ⅲ層より明るく、しまり、粘性ともある。通常この層の上面で遺構が確認される。縄文時代の遺物も包含される。

Ⅴ層　黄褐色粘質土層　この層からローム層となる。粘性、しまりともある。As－YPの粒子を混入する。いわゆるソフトローム層であるが、この地域ではソフト化されていない。この層の上面にスリッコと呼ばれる1～2cm程の厚さをもつ火山灰の凝集層が存在する。縄文時代前期の住居址の一部はこの層の上面を床面としている。

Ⅵ層　黄色軽石層　浅間山を噴源とする板鼻黄色軽石（As－YP：約1.3万年前）の純層。しまり、粘性ともない。縄文時代前期の住居址の多くは、この層を掘り抜いたところ（Ⅶ層上面）を床面としている。



第４図　基本層序柱状図

V 遺 跡 各 説

1 中 原 遺 跡

(1) 縄文時代の遺構・遺物の概要

縄文時代では、早期と前期前半期の遺構と遺物が検出された。まず早期では、D区において押型文段階の土壙1基が検出された。遺物は少なく、土壙より山形押型文土器が若干検出されたほか、調査区外で三角錐形石器1点が表面採集されている。

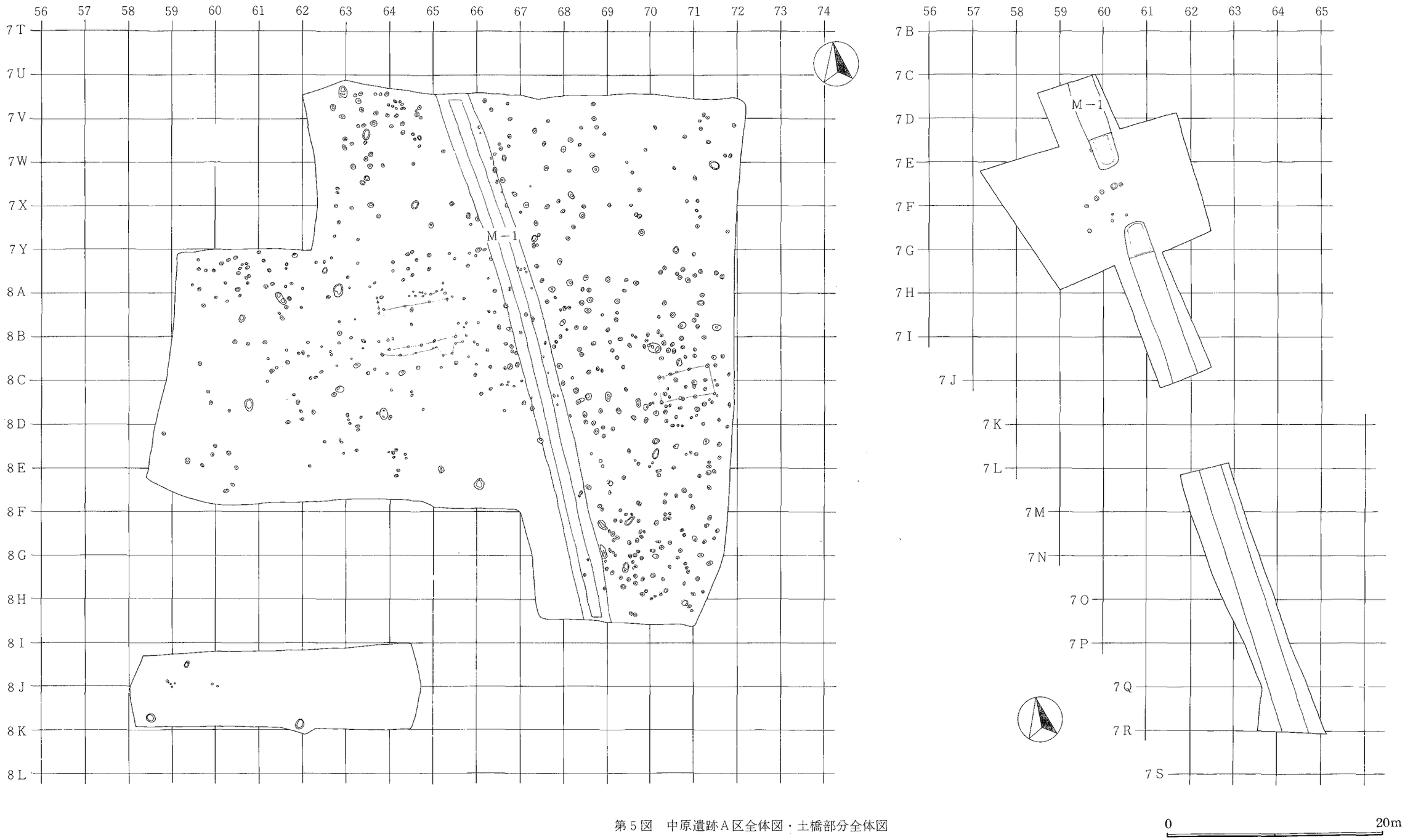
また、前期前半期では集落址が存在していたことが確認された。検出された遺構としては、住居址16軒・土壙約30基などである。住居址はC区9軒、D区4軒、E区3軒である。重複例は少なく、わずかに1例であるが、拡張ないしは建て替えが行われた例は3例確認された。これらの住居址の炉址は大部分「コ」の字形に転石を配置した石囲炉であるが、地床炉の例も存在する。また、比較的規模の大きいJ－14号住居址は炉址周辺が一段低く掘り窪められており、その中に炉体土器が設置されたものであった。

遺物の出土状態をみると、多くの住居址で覆土中から廃棄された状態で検出されている。この場合、多量の土器、石器のほか拳大程度の大きさの焼礫が多量混在した状態で検出されている。また、遺物が比較的少量しか検出されない例もしばしば確認された。一方、住居址の柱穴中から土器片、剥片A類、剥片B類、スクレイパーB類、磨石、凹石、結晶片岩の小形棒状礫、炭化材などが検出される例が多い。これらの遺物は柱穴の底部から検出されることがしばしばあり、意図的に柱穴に入れられた可能性がある。

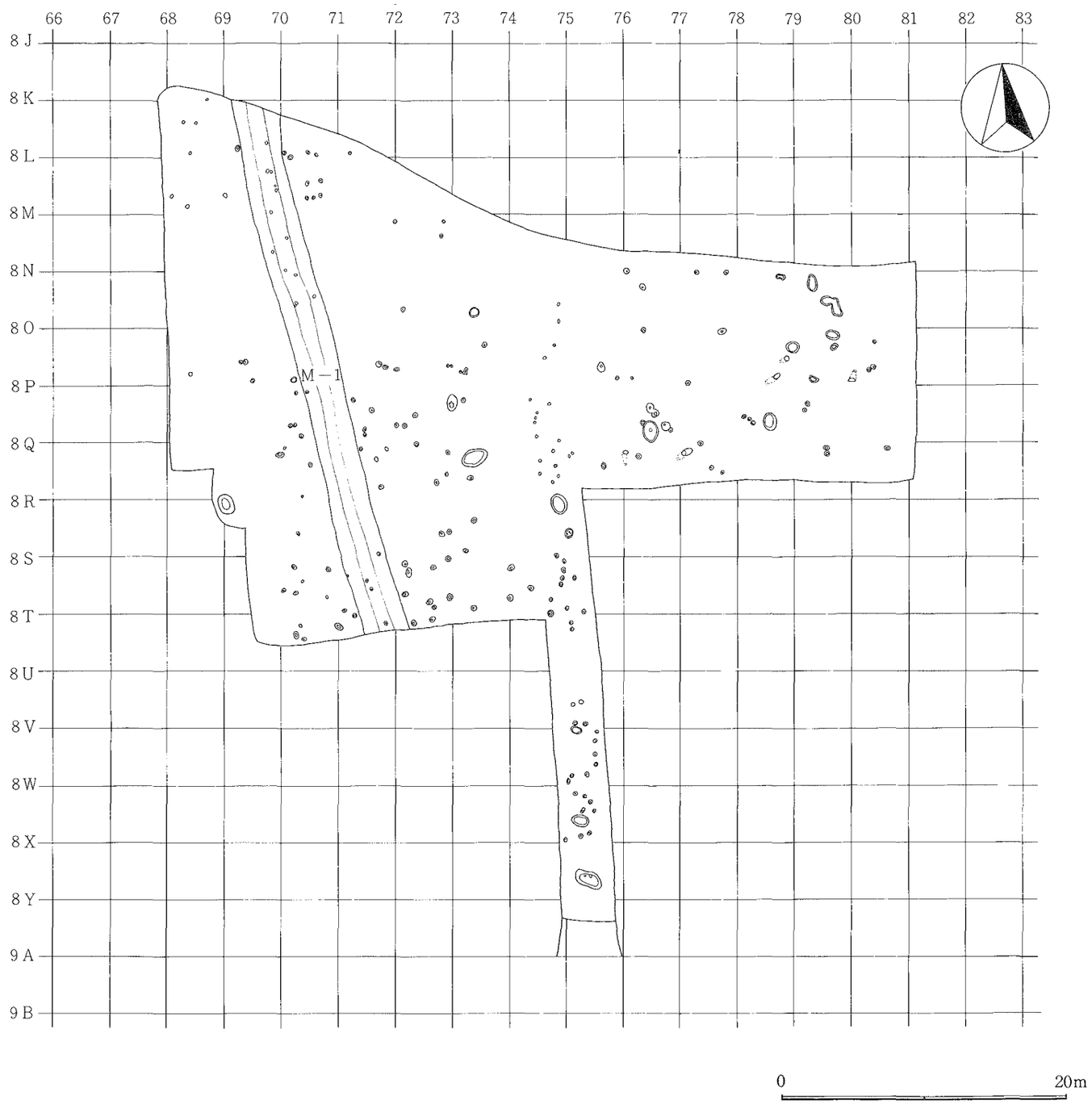
遺物としては多量の土器、各種石器類、焼礫、炭化物（胡桃）等が出土した。

(2) 弥生時代の遺構・遺物の概要

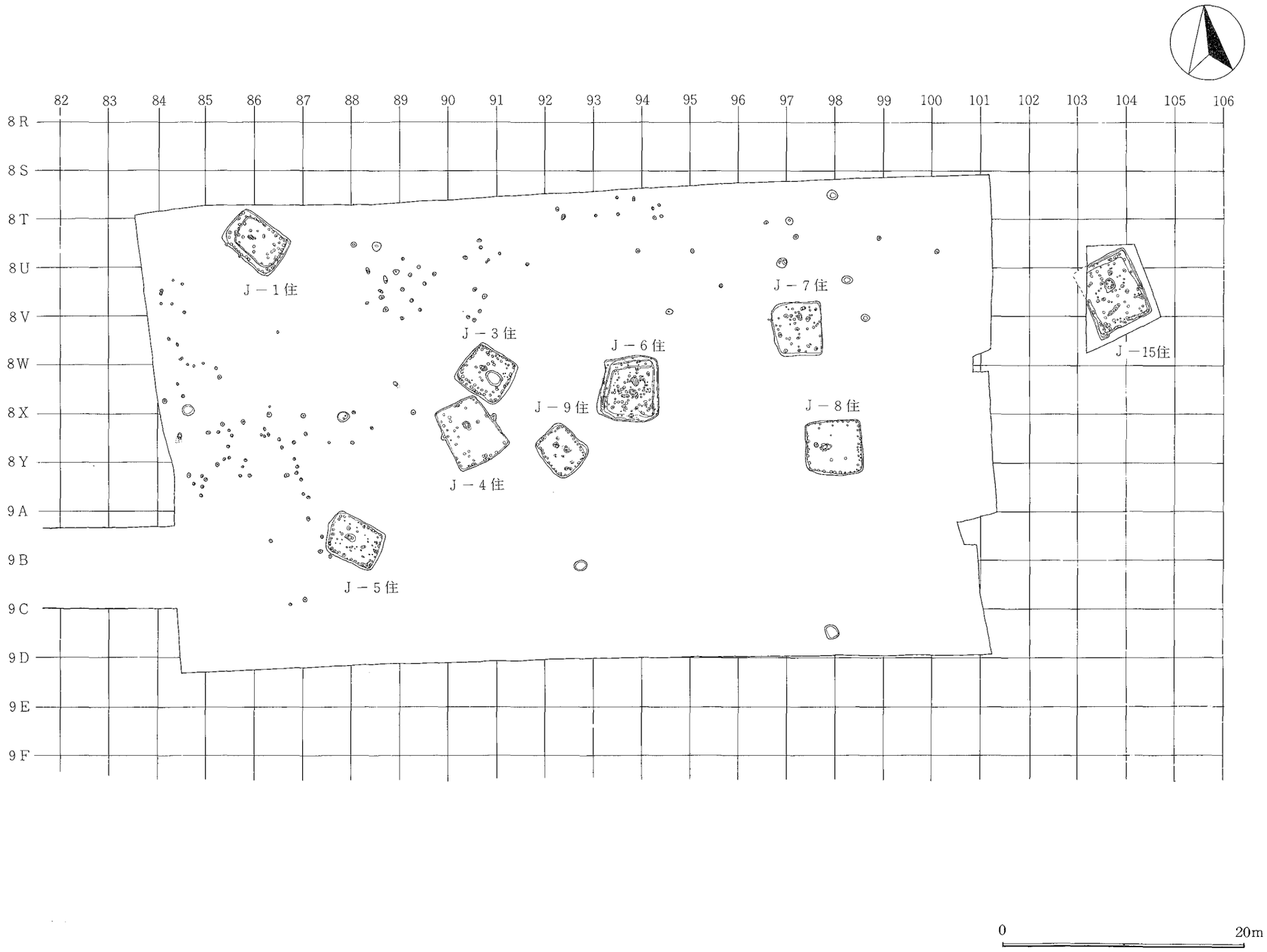
弥生時代ではA区・F区において中期前半期の土壙が数基発見され、壷・甕の破片が若干検出された。土壙は不正形のもので掘り込みは浅い。



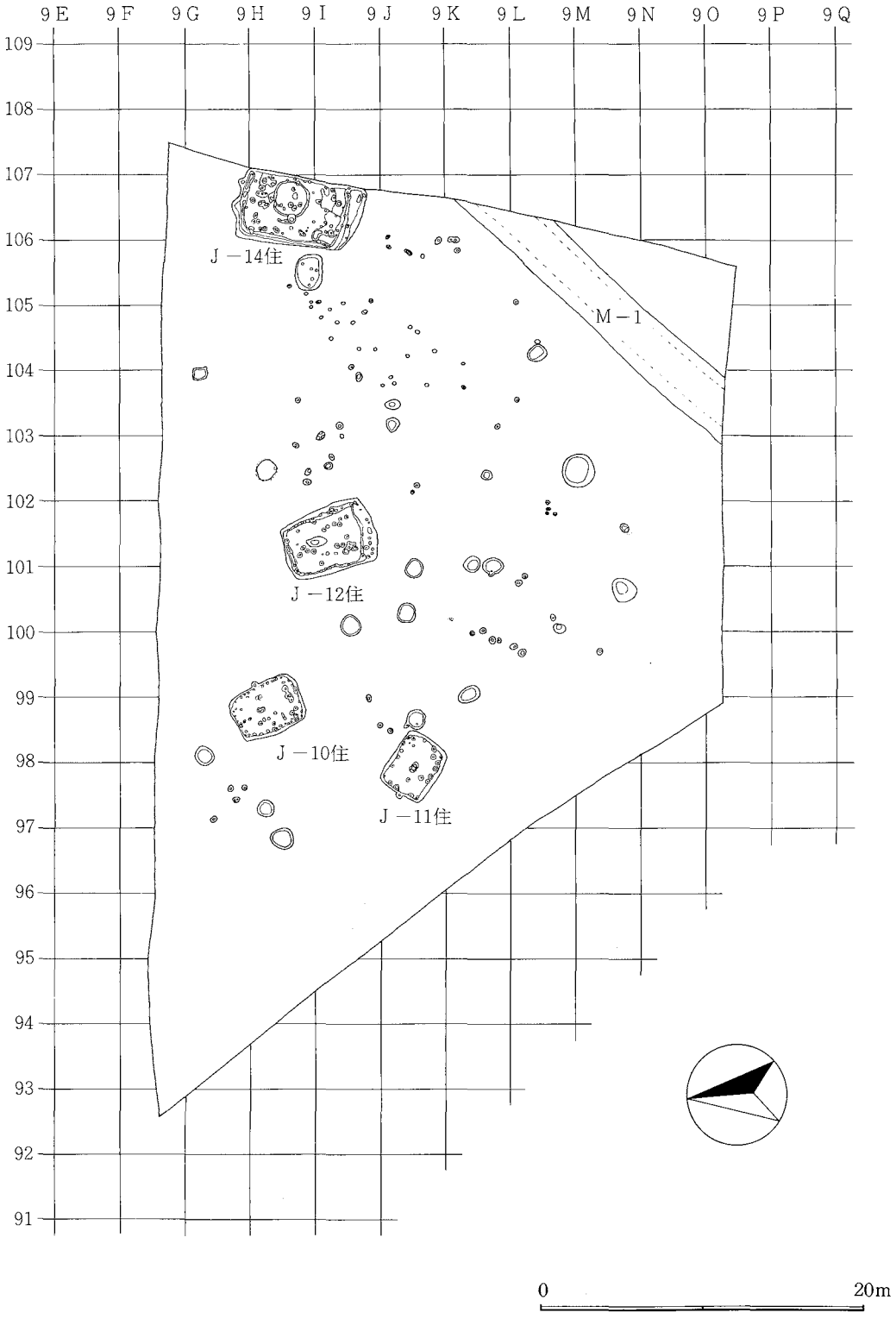
第５図　中原遺跡Ａ区全体図・土橋部分全体図



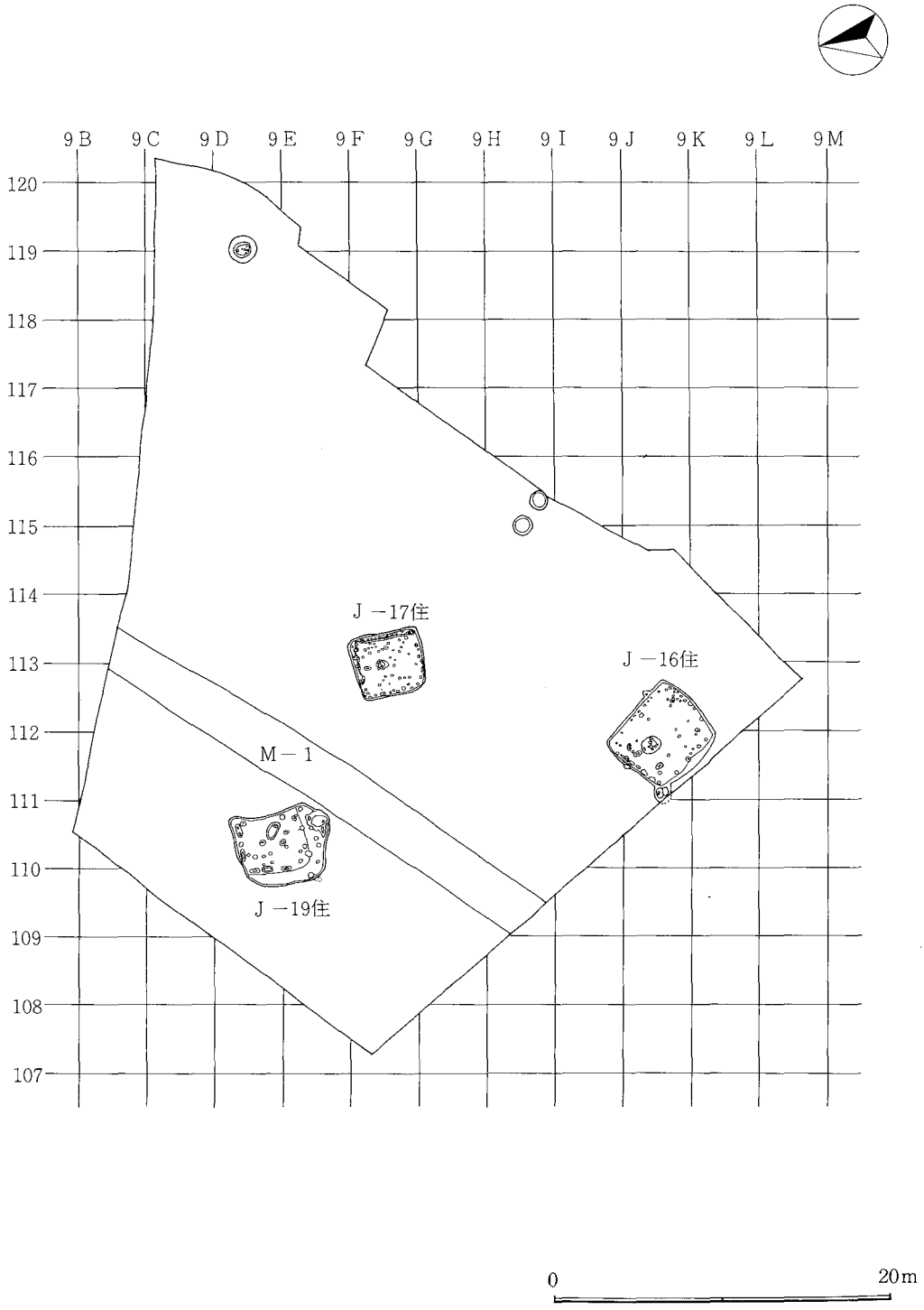
第６図　中原遺跡Ｂ区全体図



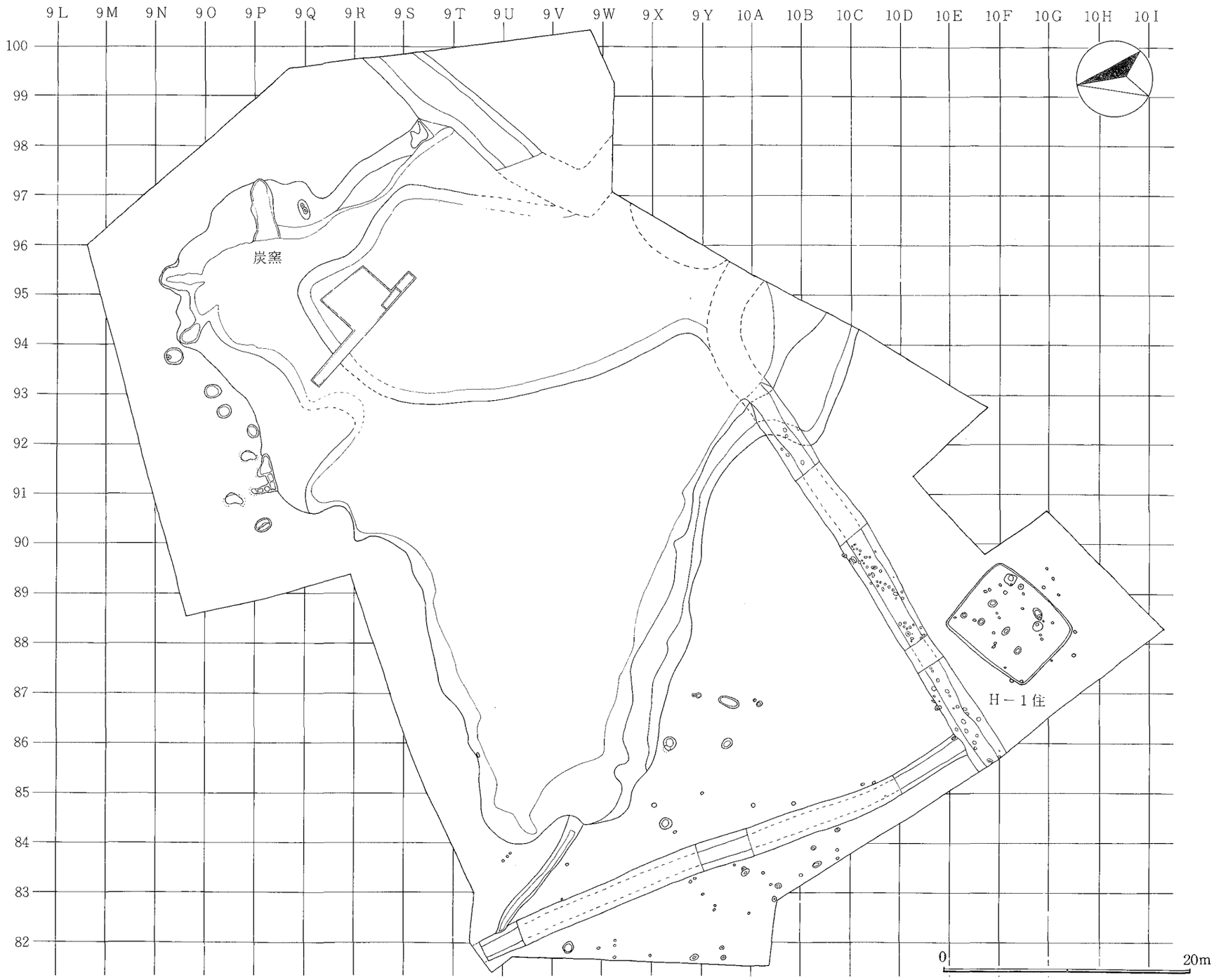
第７図　中原遺跡Ｃ区全体図



第８図　中原遺跡Ｄ区全体図



第9図　中原遺跡E区全体図



第10図　中原遺跡F区全体図

(3) 古墳時代の遺構・遺物の概要

古墳時代の遺構としては、F区において4世紀の住居址1軒が検出された。この住居址からは高坏等の遺物が少量検出された。

(4) 奈良・平安時代の遺構・遺物の概要

奈良・平安時代では、台地上を台形に区画する溝とそれに付随する各種施設の存在することが確認された。この施設は、9世紀頃の「牧」の放牧施設と推定される。溝で囲まれた区画の規模は、南北約４１０ｍ・東西２６０～３００ｍであり、推定面積は約8.9haと非常に大規模な施設である。溝の形態は、上幅約３ｍ・下幅約１ｍ・深さ約1.2ｍで、溝の外側には土塁が存在していたことが、覆土の状態から確認された。

出入口は、西辺の北から約９０ｍの部分で確認され、幅約５ｍの土橋状のものであった。また、区画内には多数のピットが存在し、柵状に一列に配列するものは幾つか確認することができるが、掘立柱建物址（３×１間）は１棟確認されたにとどまる。

そして、溝で囲まれた区画の南西隅に大規模な沼地が存在し、牧の水場として利用されたと考えられる。沼地の規模は約５０ｍ×４０ｍとかなり大規模なものである。また、沼の東にほぼ同時代とみられる炭焼窯が1基検出された。

遺物としては、溝の中から土師器・須恵器の破片（9世紀前半）が検出されたほか、沼の底面（浅間Ｂ直下）からは、木製品（板材・棒）・自然木などが検出された。しかし、概して奈良・平安時代の遺物は非常に少量であった。

(5) その他の遺構・遺物

Ａ区では浅間Ｂ軽石降下以降の掘立柱建物址が1棟検出された。この建物址は溝の西側に位置し、３×１間で南側に庇を有する。この建物址の周囲にも多数のピットが検出されたが、明確に配列するものは確認することができなかった。また、この建物址の周囲ではⅣ層上面で土間状の硬化面が数カ所確認された。この硬化面が建物址とどんな関係があるかについては、不明であるが、今後の調査において留意する必要がある遺構である。

2　東畑遺跡

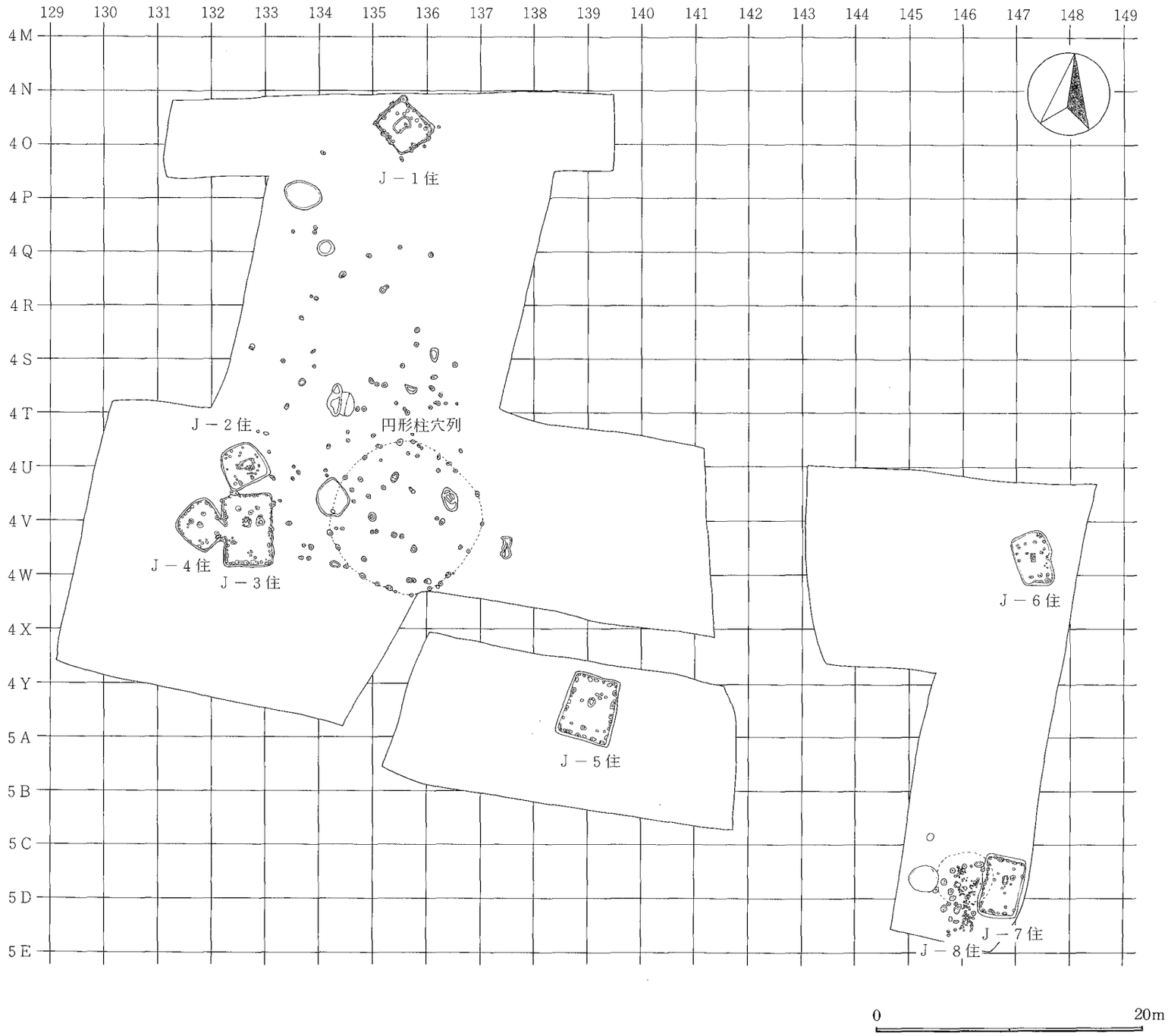
(1)　縄文時代の遺構・遺物の概要

この遺跡は、縄文時代の遺跡であり、前期から中期にかけての遺構と遺物が検出された。前期前半期では集落址の存在が確認された。検出された遺構としては、住居址６軒、円形柱穴列１基、ピット多数がある。住居址の形態は長方形ないしは正方形であり、南側がやや開くものもある。主柱穴は６本または４本で、壁に沿って壁柱穴が並んでいる。また、炉址は「コ」の字形に転石を配置する石囲炉が多いが、地床炉の例もある。住居址における遺物の出土状況は、中原遺跡と同様に覆土中に土器、石器類、焼礫が多量廃棄された例と、少量の遺物しか検出されない例が存在する。

円形柱穴列は、楕円形を呈した柱穴が約20本円形に配列されたもので、円の直径は約11ｍである。この内側には主柱穴に相当する柱穴が存在しないことと、周囲の柱穴がすべて直立していることから、上部構造のない屋外施設であった可能性が高い。また、楕円形の柱穴の長軸は円周に沿う形で掘られており、偏平な割材等が埋められていた可能性がある。こうした遺構は通常の住居とは考えにくく、公共的性格の強い特殊な施設と考えられる。

前期後半期では、住居址１軒が検出された。この住居址は不正形な正方形を呈するもので、深鉢形土器の下半部を炉体土器として設置した埋甕炉であった。遺物はほとんど検出されなかった。

中期終末期では、敷石住居址１軒、土壙１基、竪穴状遺構１基が検出された。敷石住居址は依存状態が比較的良好で、柄鏡形に敷石が配置されている。柄部先端と柄部と住居部分の付け根に埋甕が設置されていた。敷石の用材は偏平な転石で、材質は在地の石材とみられる安山岩系であった。遺物は埋設土器以外は少量の土器片、石器類が検出されただけであった。



第11図　東畑遺跡全体図

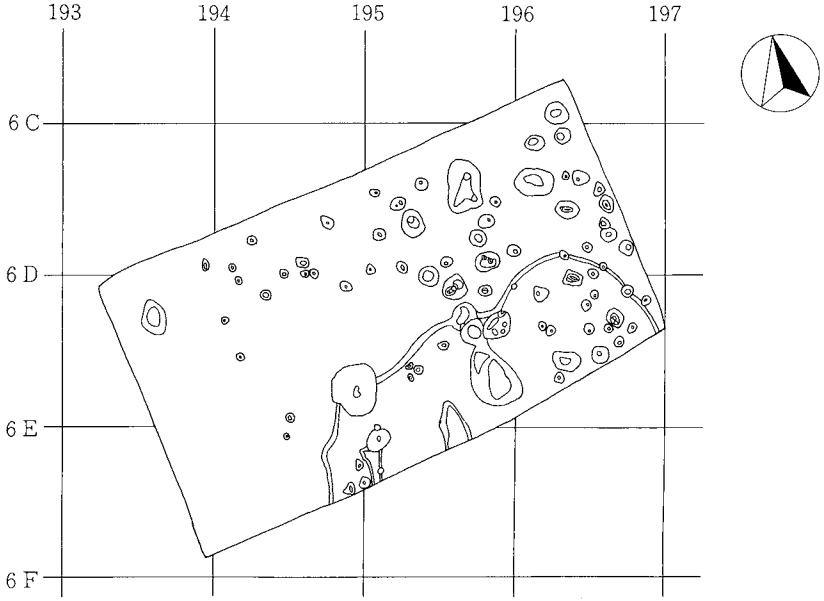
3　金井谷戸遺跡

(1)　縄文時代の遺構・遺物の概要

この遺跡は、縄文時代早期から前期にかけての遺跡である。このうち中心となるのは早期押型文土器段階の遺構と遺物である。検出された遺構としては、竪穴住居址１軒と、集石を伴う土壙４基、ピット多数である。

住居址は約４ｍの円形を呈していると推定されるが、南半分はすでに道路によって削平されている。Ⅳ層下部において浅い掘り込みが確認された。柱穴は壁際にやや斜めに存在している。住居址内から検出された土器は数十片と数量的にはさほど多くない。この中には、押型文・撚糸文・縄文の各土器群が含まれるが、押型文と縄文の土器群が多い。集石を伴う土壙は、拳大から洗面器大の焼礫が充填されている大形の土壙と、土壙の脇に拳大程度の焼礫が約20～30個まとまる小形の土壙がある。大形の土壙では長さ約 1.8ｍの楕円形で、小形のものは長さ約 0.7～ 0.9ｍの楕円形である。

また、早期の遺物としては、土器では押型文・撚糸文・縄文の各土器群の土器片が検出された。押型文では山型・楕円・格子目のものがあるが、山型が主体を占める。そして、石器では局部磨製石鏃・石鏃・スクレイパーＢ類（削器・礫器）・特殊磨石・磨石・凹石・砥石・磨製石斧（偏平な小石に刃部を作出したもの）・結晶片岩製の線刻を施した石製品等が検出された。



第12図　金井谷戸遺跡全体図

0　10m

4　下宿東遺跡

(1)　縄文時代の遺構・遺物の概要

縄文時代では、前期前半の住居址１軒と、前期後半から中期にかけて２軒が重複した住居址、土壙１８基が検出された。この遺跡はトレンチャーによる撹乱が著しく、遺存状態は悪い。前期前半の住居址であるＪ－１号住居址は、この段階のものとしては大形のものであり、炉址の周囲の部分は２×３ｍの浅い掘り込みを有するものである。また、Ｊ－２号住居址は２軒が重複した住居址であり、土壙も重複していることと、道路により半分しか調査できなかったため、不明な部分が多い。

(2)　古墳時代の遺構・遺物の概要

古墳時代の遺構は検出されなかったが、奈良・平安時代の遺構であるＭ－１号溝中より５世紀の遺物が多量検出された。なお、南側に隣接する平成２年度調査部分では当期の集落址の存在が確認されている。

(3)　奈良・平安時代の遺構・遺物の概要

奈良・平安時代の遺構としては、台地を区画する溝が確認された。この溝は上幅約３ｍ、深さ１～1.5ｍの逆台形状を呈する。そして、覆土の最上層にＡｓ－Ｂ が純層で堆積している。今回の調査区内ではクランク状に折れ曲がっている。

この溝の覆土中からは縄文時代と古墳時代の遺物が検出されているが、形態・規模等は中原遺跡のものと類似しており、奈良・平安時代の「牧」の施設の一部にあたる可能性が高い。

5　北東・堤下遺跡

(1)　縄文時代の遺構・遺物の概要

縄文時代では前期後半の住居址が1軒確認された。しかし、今回は確認したに留まり、遺構の調査は平成2年度に実施している。

(2)　古墳時代の遺構・遺物の概要

古墳時代では、6世紀の住居址3軒と、円形の平地式建物1棟が検出された。住居址は遺存状態が良好であった。また、Ⅲ層上面で確認することができた平地式建物は、直径約4mの円形に幅40cm程の周溝が巡り、周溝内に柱穴が存在する形態のものである。

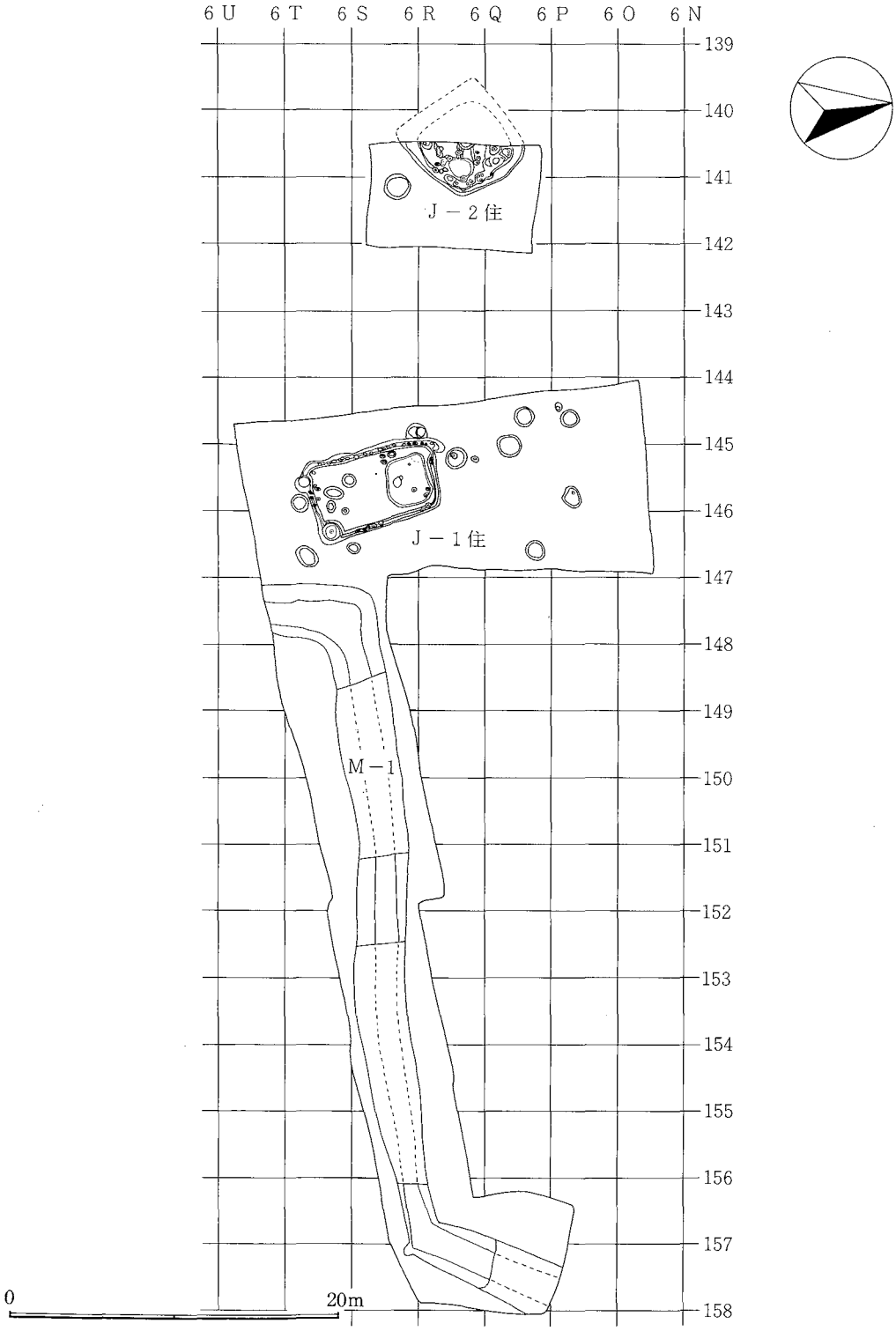
6　乙北原遺跡

(1)　縄文時代の遺構・遺物の概要

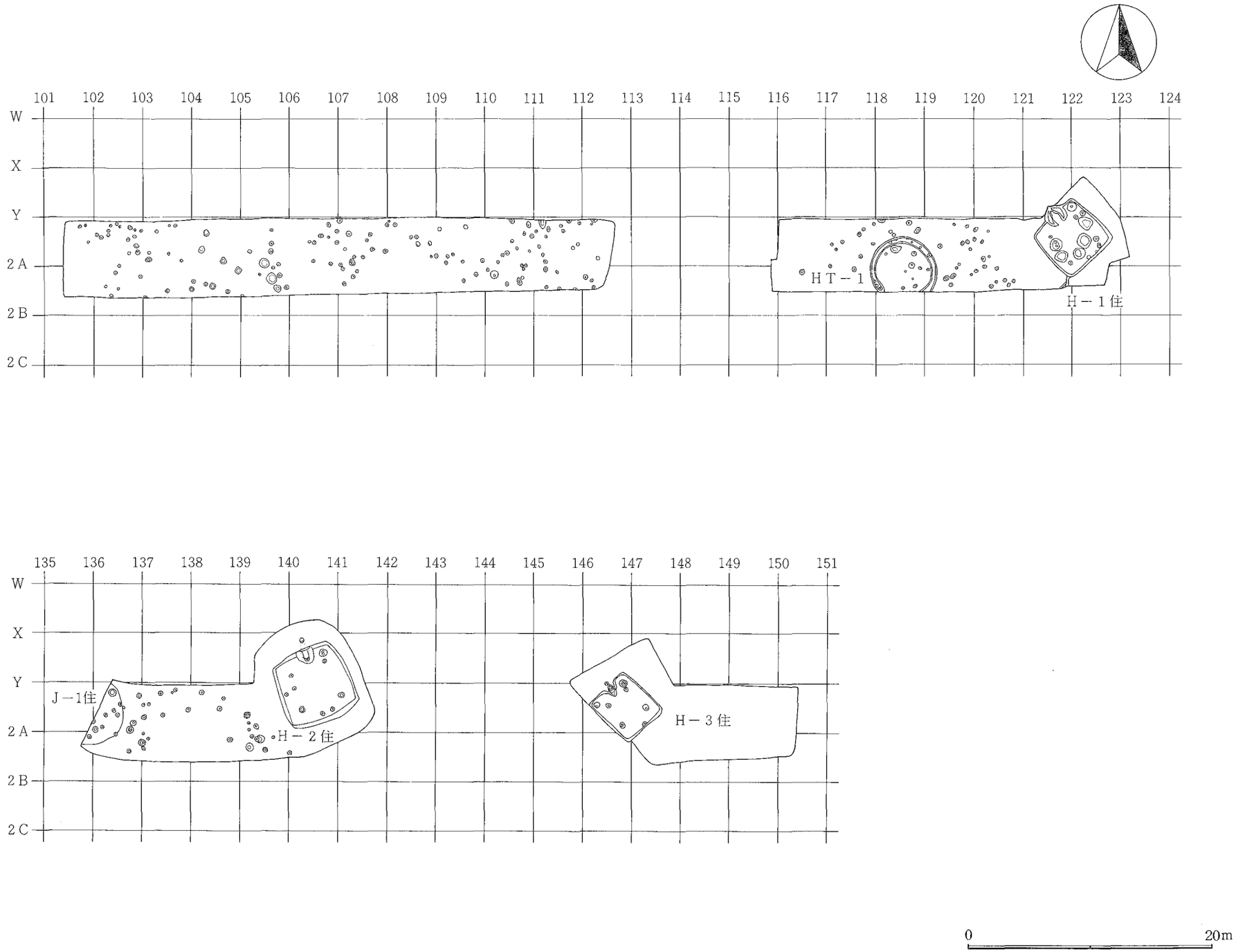
この遺跡からは縄文時代晩期の住居址が検出された。住居址は方形で周囲に周溝が巡る。炉址は石囲炉である。遺物は極めて少なかったが、住居形態・炉址の形態等から縄文時代晩期のものと推定される。なお、この住居址は本来掘り込みがない平地式の住居であった可能性が高い。

(2)　奈良・平安時代の遺構・遺物の概要

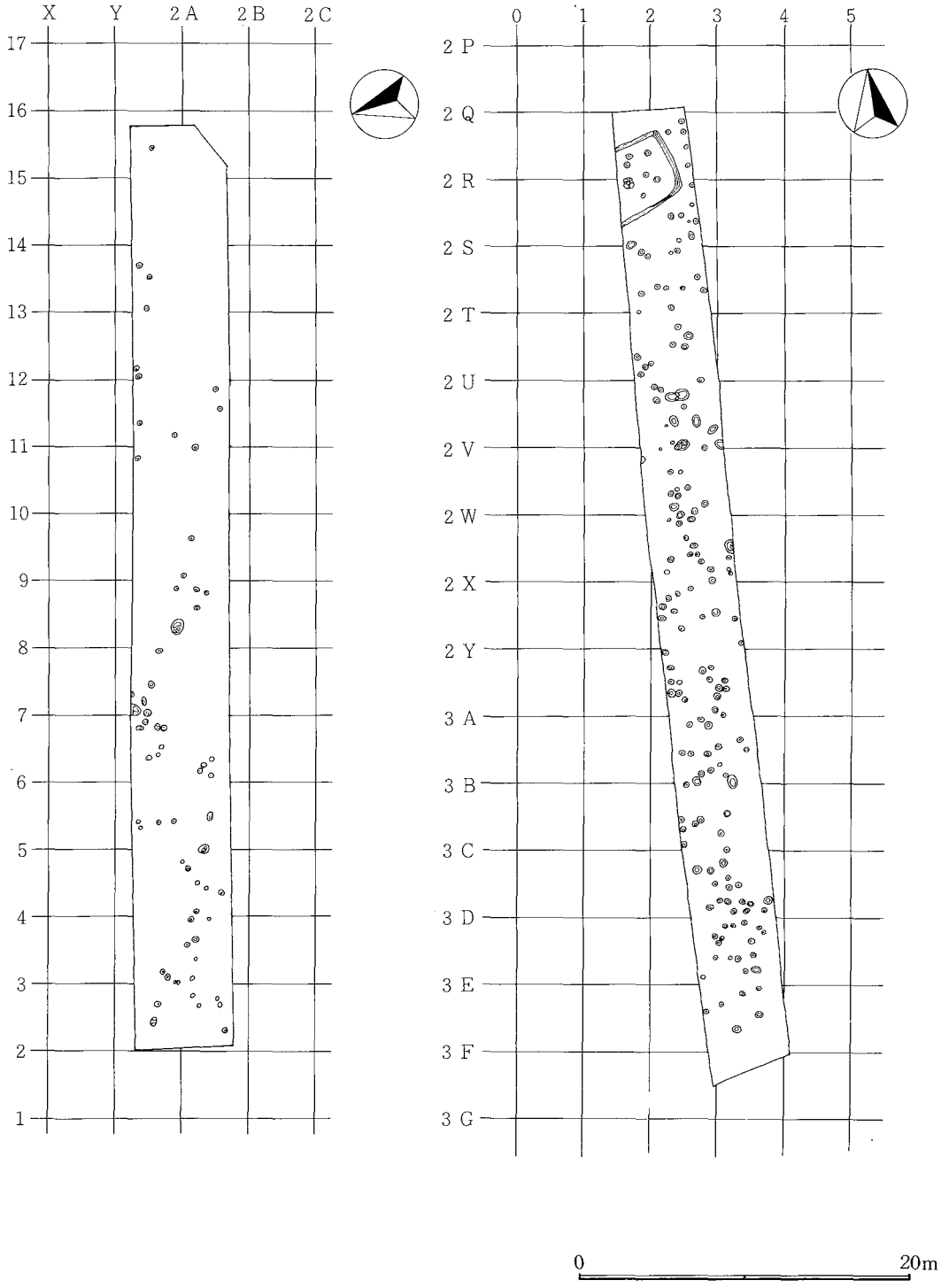
この時代の遺構と推定されるものには、非常に多数のピットがある。これらのピットは覆土から当期のものと推定されるが、遺物は非常に少ない。



第13図　下宿東遺跡全体図



第14図　北東・堤下遺跡全体図



第15図　乙北原遺跡全体図

Ⅵ　ま　と　め

1　縄文時代前期前半期の集落について

今年度の調査で検出された縄文時代前期前半期の住居址は、中原遺跡では16軒、東畑遺跡では６軒、下宿東遺跡では１軒で、合計23軒が検出された。このうち、中原遺跡では拡張された住居址が中原遺跡では３軒存在するので、当期の住居総数は26軒である。また、これ以外に中原遺跡では土壙群も検出された。そして、これらの遺構は関山式の範囲内に限定されると推測される。

これらの住居址の中で、重複例は東畑遺跡の１例（Ｊ－３・Ｊ－４）のみである。また、非常に近接していて、同時に存在していたとは考えにくい例が中原遺跡に１例（Ｊ－３・Ｊ－４）存在する。したがって、当期の集落の形成は少なくとも２期以上にわたっていたことが理解される。また、調査区内における住居址の分布状況をみると、隣接した複数の住居址が同方向を向いている場合があることがわかる。例えば、中原遺跡Ｊ－１～５・９、Ｊ－６～８、Ｊ－10～12などがグループを形成している。

また、土壙はＤ区に集中して土壙群を形成している。ここでは当期の住居址とは全く重複しておらず、土壙群と周囲の住居址が同時期に形成された可能性を有している。一方、東畑遺跡では直径約11ｍの円形柱穴列が検出されているが、この遺構の上部構造を支えるための主柱穴は内側にはなく、屋根等の上部構造物は存在しなかったか、非常に簡単なものであった可能性が高い。そして、この遺構が集落内でどんな機能を果たしていたかについては、縄文前期前半期の社会を解明する上で重要な意味を持っている。

また、住居址がいくつかの支群に分かれていることや、土壙が特定部分に群を形成していることが遺跡の中でどんな意味を有しているかについても、出土した土器の型式学的検討と出土遺物の多角的検討を含めて今後の検討課題である。

2　奈良・平安時代の溝とその付随遺構について

これまでの中野谷地区遺跡群の調査により、下塚田遺跡、中原遺跡、下宿東遺跡において、台地を区画する大規模な溝の存在が明かとなった。これらの溝は規模・形態・覆土の堆積状態（Ａｓ－Ｂが最上層に堆積する）等の点で共通しており、出土遺物などから奈良・平安時代の遺構と推定される。

今回の中原遺跡の調査により、この溝が約８～９haの平坦地を囲んでいることが確認された。そして、溝の外部に土塁状の施設が存在したとみられる。また、この溝に囲まれた中には自然湧水によって形成された大規模な沼地も取り込まれている。しかし、この溝に囲まれた内部にはＡ区で検出されたようなピット群が存在するものの、縄文時代以外の住居址はまったく検出されていない。また、奈良・平安時代の遺物は表面採集でも非常に希薄な分布状況であり、この囲みの中に集落が存在した可能性は極めて低い。

一方、下宿東遺跡で検出された溝はクランク状に折れ曲がっていることと、台地の先端部分に存在することから台地を何らかの目的で区画したものである。しかし、この遺跡でも奈良・平安時代の住居址は全く存在しないので、集落を区画する溝とは考えられない。また、下塚田遺跡では溝の西側に７世紀後半以降の鍛冶工房址が４軒検出されているものの、通常の住居址はまったく確認されなかった。

このように台地を区画する溝は、通常の農業集落の施設の一部である可能性はほとんどなく、畠などの生産遺構の区画と「牧」の放牧施設の囲いなどの可能性が考えられる。しかし、この区画が畠に伴う施設であると考える場合、土塁が区画の外側に存在するので外敵に対する防御機能は低下してしまう点と、周辺で通常の住居址が全く検出されていない点と、下宿東遺跡に存在するクランク状の溝の存在理由が不可解である点で整合性がない。

また、「牧」の放牧施設と考えた場合、計画的に大規模に造られていること、内側から外側へ出にくいように溝と土塁が存在していること、水場と考えられる沼地が区画の中に取り込まれていることなどは整合性を有している。そして、東山道と著しく離れていないことや、交通の難所である碓氷峠に比較的近い立地環境などといったこの遺跡の周囲の状況からみても整合性を有している。したがって、この溝とそれに付随する遺構は「牧」の放牧施設の可能性が高い。

しかし、「牧」には放牧施設以外にも調教用の馬場、管理施設、厩舎などの諸施設が存在していたと推定されていることから、今後の調査においてはこうした施設が確認されるかどうかといった問題や、この「牧」を管理していた豪族や管理集団の居住していた集落はどこに存在していたのかといった問題を含めて今後の課題である。

写　真　図　版

中原遺跡全景

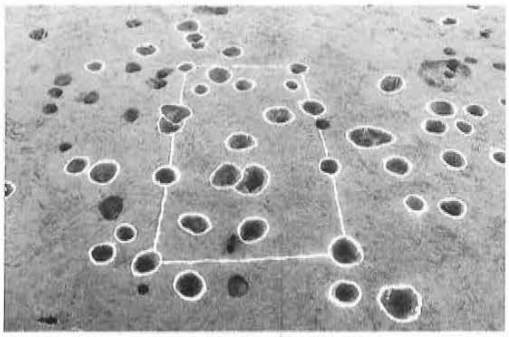
中原遺跡A区・土橋部分

図版－2

中原遺跡A区～B区・M-1号溝

中原遺跡A区全景

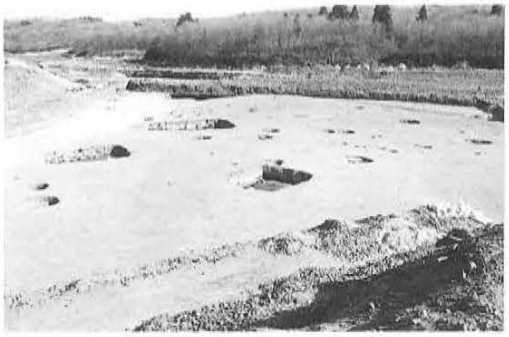
M-1号溝土層断面



HT-1号掘立柱建物址

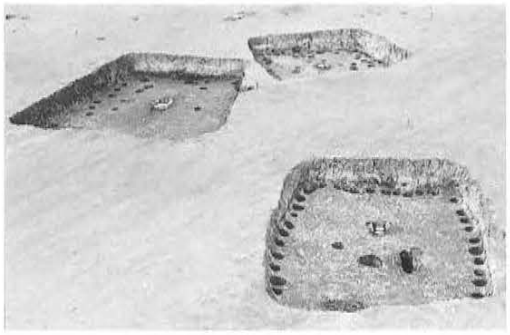
O-1号落し穴

中原遺跡C区全景



中原遺跡D区全景

中原遺跡E区全景



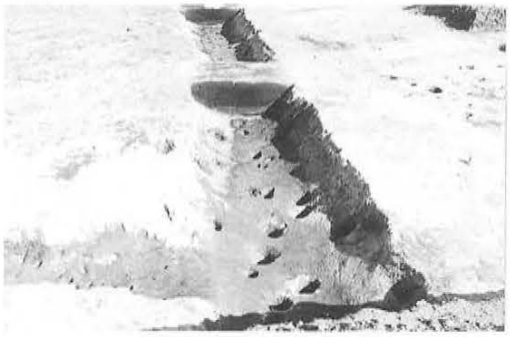
中原遺跡C区J-3・4・9号住居址

中原遺跡D区J-14号住居址

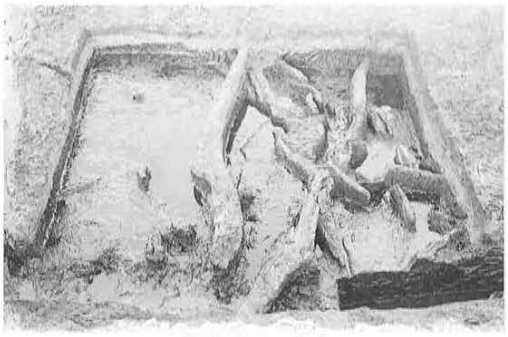
図版－4

中原遺跡F区全景(1)

中原遺跡F区全景(2)



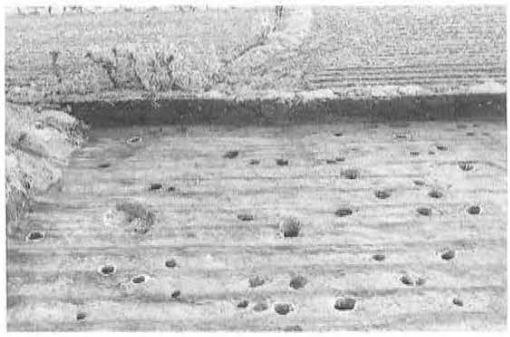
F区M-1号溝南西隅部分



F区水場・流木

F区馬骨出土状況

東畑遺跡全景



円形柱穴列

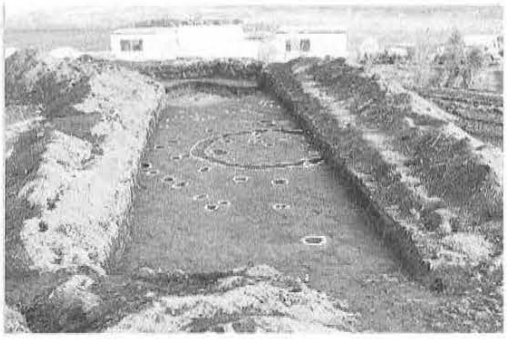
J-8号住居址

金井谷戸遺跡全景

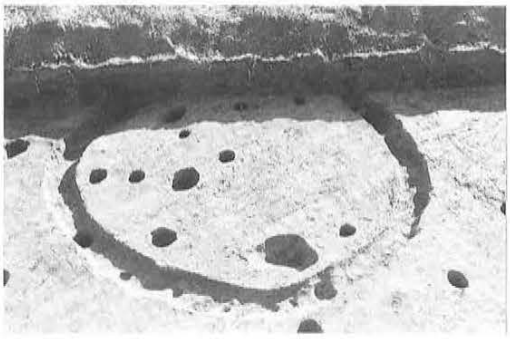
S-1・S-2号集石

図版－6

下宿東遺跡全景



北東、堤下遺跡試掘トレンチ



平地式建物址

H-3号住居址竈

乙北原遺跡J-1号住居址

中野谷地区遺跡群発掘調査概報２

－平成元年度県営畑地帯総合土地改良事業
横野平地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

発　行　日　平成３年３月20日

編集・発行　安中市教育委員会
群馬県安中市安中１丁目23－13

印　　刷　マツダ印刷株式会社